

「ア、左様かいナ。いつまでも子供ぢやと思ふた親が悪かつた。いくつ位いの……………」

「さ誰でも左様思ひますやろがナ。處が違ひますので。蜜柑が欲しい。」

「ギエツ何ぢやと。」

「蜜柑が喰べたいと仰有るので……………」

「それを汝こなた。何と云はしやつた。」

「何ともお易い事で御座ります、直ぐ使ひを出しまして買ふて参じます、何なら此お部屋を蜜柑詰めにもして差し上げますと申しました。左様しましたら甚まふお喜びなされまして、待てる依てに頼むでと仰有て何時いつに無い御機嫌でムります。あの調子ならもうやがて御本復。ヘエ、お芽出度う存じます。」

「これ番頭どん。そんな無茶云ふて何ふなさる。今日はこれ何日ぢやと思ひなさるのぢや。六月の二十一日、土用の最中さなかに何處の世界を捜しても、蜜柑のみの字も有るかいナ。俵が云ふも不孝云わぬも不孝と云ふたのは當然あたりまえぢや。」

「あツ。ほんに季節じゆんをウツカリ……………」

「ウツカリで事が濟みますかい。俵は自分の希望のぞみが叶ふと思ふに依て今は元氣も出てるやろふが、ゴロツとあてが外れて見い。一時に氣を落として死で仕舞ふに違ひない。左様なれば差詰めお前さん

は手は下ろさいでも立派に主殺しぢや。何の罪が重いと云ふでも親殺し主殺し程重いものは有りやせん。町中引廻しの上逆磔たがひや。」

「トホ、、、、。惡氣が有て云ふたんや御座りまへん。どふぞ御了見を願ひます。」

「私が了見しても、お上さんが了見をなさらん。さア早ふ出掛けて蜜柑を捜しといなされ。廣い大阪ぢや、どんな拍子で一つ位の蜜柑が無いとも限らぬ。」

「ほんに左様でムります、それでは早速捜して参ります……………ア、、うつかりと豪い事請合ふて仕舞ふた。どふぞ有て呉れたら良えがなア……………八百屋はん、御免やす。」

「へ、おいでやす。」

「お宅に蜜柑はおまへんやろか。」

「何云ひなはる。此熱い時に蜜柑がおますかいナ。」

「冬の賣れ残りでも……………」

「そんな物が今まで保ちますかいナ。」

「左様なら……………ア、いよく磔刑かいナ……………今日は御免やす。」

「まアおは入り。」

「お宅さんに蜜柑はおまへんか。」